

新潟県中越地震から7年 被災地復興の秘訣を聞いた

職場
ルポ

—株式会社きものブレイン

—三陽工業株式会社

社会福祉法人中越福祉会

—障がい者就業・生活支援センターこしじ—



新潟県中越地震

「地震なんかに負けない」



(写真) 小山博孝 岩尾克治

中越福祉会・みのわの堂「工務こしじ」



「働く広場」2005年2月号に掲載



山古志村出身の関朋子さんも
元気に働いていた

東日本大震災

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝

WORKSHOP REPORT

株式会社きものブレイン

〒948-0003 新潟県十日町市本町6-1
TEL 025-752-7700 FAX 025-757-2008



2004（平成16）年10月の新潟県中越地震（以下、中越地震）から2カ月後、被災地の数カ所の事業所と障害者就業・生活支援センターを訪ねた。それから約7年後、昨年3月に東日本大震災が起きた。中越地震の後、障害者の雇用はどうなっているのだろうかとの思いで、再び現地を訪れ、さらに東北復興へのメッセージもいただいた。

今回の訪問先は、十日町市の「株式会社きものブレイン」と、小千谷市の「三陽工業株式会社」、震源地に近い「障がい者就業・生活支援センターこしじ」である。

強い意志で、
自力で立ち上がろう！

——きものブレイン

「きものブレイン」1988（昭和63）年設立。きもの総合加工（クリーニング・染み抜きなどのアフターケア、縫製・ガードなどのビフォー加工）を主に、着物の販売、テキスタイル事業などを手がける。従業員230人、うち障害者は1割の23人と多い。

被災地の着物 修復で恩返し

この7年間で、副社長の岡元真弓さんに振り返ってもらった。十日町は、中越地震後、2年続きの大雪、07年の新潟県



きものブレイン岡元真弓副社長

中越沖地震（以下、中越沖地震）、11年夏の水害と、自然災害続きだった。「中越地震は就業時ではなかったのに、安否確認が大変でした。それまでも避難訓練はしていましたが、社内に防災管理委員会を設置しました。障害者がいかに避難するかが重要ですね。昨年は消防車がきて、屋上で取り残されたという想定で、下に降ろす訓練や濃煙訓練もしました。いまは避難訓練を実施すると、3分あれば点呼が終わります」
3月12日の長野県北部地震でこちらも被害が出たが、東日本大地震3日後には、社員が支援物資を持って被災地に行き、「何かしなければ」となった。
「東北の取引先が被害を受けていました。一番ひどい地域の3社は店舗が津波に流され、お客様の着物が水に浸かりました。中越地震のときに全国から支援や温かいお言葉をいただいたりしたので、恩返ししたいと考え、主力取引先3社の水に浸かった着物千枚は無料で、そのほか呉服屋さん経由で預かったお客さんの着物2千枚を特別価格で修復しました」



作業を開始すると、工場内は塩と汚水のおいにおいに満ちたそう。被災地には着物相談所も設けた。

「着物は、成人式、結婚式、入学式などの思い出があります。リーマンショック以来、厳しい時代ですが、社長が恩返しをするのだと踏み切りました。中越地震を経験していなかったら、そこまでのめりこまなかったと思います」
3カ所の工場の外壁などの修理で3千万円かかった。自宅の修理や建て直して借金を抱えた社員もいるという。

最大の取引先が倒産。 でも不死身

着物のアフターケアは1年に約30万点。それまでの信用があり、中越地震によって取引が減ることはなかった。

「風評被害もあり、販売した高価な着物を被災地に預けるのをためらう呉服屋

仕上がった着物に針などが入っていないか、機械にかけて点検する知的障害者



岡元副社長の思いを引き継いで、障害者雇用をすすめる
母親である松田章奈さん



災害時の避難方法を常に考える
車いすの佐藤和真さん

さんもあったと思いますが、信頼して預けていただいたこと、納期が多少遅れても待っていただき、変わらずに支援してもらったことが一番ありがたかったですね」

地震以上の大打撃は、翌年に最大の取引先が倒産したことだった。

「半年がかりで契約社員は減りましたが、不死身で立ち直りました。障害のある社員がいることで、彼らを辞めさせたくない」と逆に頑張れるんです」

昨年夏には、大学と共同開発した夏物の洗える絹の長襦袢、ウオッシュアップシルクを発売した。

「着物は縮小傾向にありますから、それに代わる業態を作っていこうと、手入れが簡単なウオッシュアップシルクを開発しました。古い着物の絹を裂いてテキスタイルも作製しています。中越地震後、しんどい7年間でしたが、正社員を減らさずによく頑張ってきたと思います。毎年、新卒を募集しています。若い人を採用すると会社として責任が出てきます。

商品価値の高いものを作り、生き残れる会社になりたいですね」

障害者雇用は 続けていきたい

障害のある社員にはどのような7年間だったのか。車いすの佐藤和真さんは勤続18年。伝票のデータ入力を担当している。中越地震で家の被害はほとんどなかったが、山が崩れかけて避難勧告が出され、親戚の家に1週間ほど避難した。

「何かあるたびに、どこに避難すればいいのか、行った先で生活ができるのかを考えなければならぬのが大変です。災害時の行政は人によって対応がまちまちでしたから、いざというときは自分でできることはやらなければと思います。実際の地震を経験すると、雪がある冬場ならどうなるのか、最上階の5階にいたらエレベーターが止まるのでどうなるのかと、避難訓練をしても不安があります」

佐藤さんは中越地震の1カ月ほど前に北海道旅行をしていた。「会社に無理を言ったのですが、地震の後では絶対行けなかったと思います。やろうと思ったときはやっておかないと、何が起るかわからないと思いました」

「きものブレイン」で働く障害者は一番年長の方が65歳。

障害者雇用を担当する松田章奈さんは「ちょうどいま、世代交代の時期がきていますが、副社長の思いを継いで、会社

が存続する限り障害者雇用は続けていきたいと思っています。少し増やしてもいいのではないかと考えています」と語った。

映画館をオープン。 地域の文化発信の場に

本業を頑張りつつ、何かやりたいという漠然とした思いを抱いていた岡元さんは、借金をして映画館「十日町シネマ・パラダイス」を2007年にオープンした。町に1つあった映画館が地震で営業を中止したからだ。岡元さんが館長で、長男が運営責任者を務める。

「中越地震後、市民は楽しみやおしゃべりを封印していました。私もがまんしていて、2年後に映画を見たとき、笑う場面まで泣けて、こういう楽しみ方があるのか、十日町に恩返ししたい、と思いました。町の人がいつでも行ける娯楽の場を作りたいです。秀逸で良質な作品を上映して、映画文化を提供していきたい。十日町の市民を喜ばせたかったので、遠くから来る人たちの喜んでくれる姿を見たいですね。地域の中で文化を発信したいという思いは、中越地震がなかったら考えなかったでしょうね」

劇場は126席。座り心地のいい極上のいす。おしゃれな喫茶スペース。きれいなトイレ。もちろんバリアフリー。「小粒でもキラッと光る、そんな場所にしたいですね」。居心地のいい空間に、岡元さんの思いが伝わってくる。そんな岡元



三陽工業株式会社

〒947-8504 新潟県小千谷市平沢2-3-20
TEL 0258-83-2550 FAX 0258-83-2335

小千谷市の三陽工業は、中越地震で大きな被害を受けたが、製造ラインを片付けて半月後の11月16日から操業を再開した。取締役管理部長の鈴木伸治さんに話を聞いた。

半月で操業再開。補修完了は2年後

「三陽工業株式会社」1946（昭和21）年創業。通信、コンピュータ、産業機器などの電線、加工品などの製造。従業員89人、障害者3人。

「いずれ雪は融ける」
信じて頑張る

——三陽工業

わったかな」



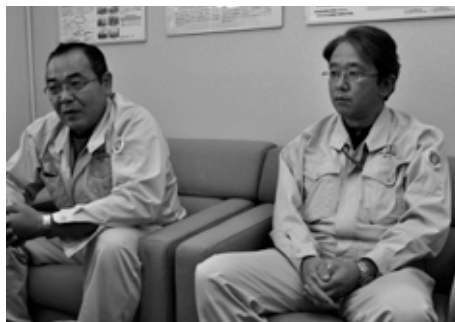
震災後、映画館のCINEMA PARADISEをオープンし、地域の文化発信の場をつくり上げた岡元さん

さんから東北へのメッセージ。 「東日本大震災に遭われた方たちも、立ち上がるには、自分の強い意志で、自力でやらなければならぬと思います。自分でやることをやって、もし制度ができたらありがたいと考える。制度ができるまで待っていたら遅い。損得や採算は度外視です。うちでは地震のときの借金がやっと終

打ち、営業が『地震で納期が……』という話をしない。対応した結果だろうと思えます。対策本部をつくってから、張り合いがあれば立ち直りも早いからと、仕事をたくさんいただけるように頑張りました」

工場の骨組みはしっかりしていたが、ブロック壁だったため、崩れないように鉄骨で補強した。メチャメチャになった事務所は天井を撤去して補修を行い、いまは会議室になっている。

「内部の補修を第一に、工場の周囲を鉄骨でサンドイッチして補強しました。製造現場優先で最後に事務方のスペースを復旧して、全部の補修が終わったのは2年後でした。一番大変だったことは、従業員の出勤でした。通勤手段がないこと、家も被災していたので、余震があったら帰っていいとしました。復旧工事を始めたころは建築関係の業者さんの都合が付かず、工事費が高かったですね。修繕費などの圧迫はありましたが、受注状況の全国的な影響はなかったように感じています。7年間で一番大変だったのは



鈴木伸治取締役管理部長（左）と川上豊課長

リーマンショックでした」

一方で、中越地震で小千谷の地名が全国に知られたこともあった。

「初めておうかがいする事業所で名刺を出したとき、地震前は小千谷市を読んでいただけなんですが、地震後は『おぢやですか、大変でしたね』と話が進みました。被災から1年間ぐらい、取引先のお客さんからの支援はとてども励みになりました」

地震発生時にトライアル雇用。その後採用へ

中越地震のとき、知的障害者と事故で身体障害になった人の2人のトリアル雇用を開始するところだった。管理部長グループ課長の川上豊さんは直接の担当ではなかったが、同じ部署にいた。

「当時は隣で、私はコンピュータシステムを担当していました。地震後の暮れから働いていると聞いていました」

2人は3カ月のトリアル雇用後、正式雇用となった。知的障害の人は東小千谷工場で働き、組立の一作業を担当している。「簡単な組立作業ですが、本人に合った仕事が見つかったからは、他の人より1日の作業スピードが早いという上司の評価をもらっています。もう1人は、本社工場でケーブルを切ったり、部品の整理をしたり、組立補助作業をしています」

三陽工業で働く障害者はいま1人。脳性まひの人は勤続20年以上。障害は重い



震災で被害を受けた工場や事務所。補修が終了したのは2年後だった

が、パソコンを使ってラベルを作ったり、機械にデータを入力している。

2人から東北へのメッセージ。鈴木部長は、「中越地震では『絆』というTシャツを作り、『山古志に帰ろう』という形で復興をできています。いかに地元に戻るかを目指して頑張るしかないかなと思います。『いずれ雪は融ける』。雪国の新潟では、大雪が降っても消えない雪はないので我慢するという考え方があります。新潟より復興までの時間がかかると思いますが、信じて頑張っていたきたいと思います」

川上課長は、「中越地震が10月末、家を建て始めたのは、早い人で翌年の春、本格的になったのは2年目の春からで、半年で仮設を出た人はいなかったですね。中越地震よりはるかに規模が大きいので、長いスパンで、ぜひ乗り切ってください」

互いが支えあう地域づくりは、日本のプラスに！

— 障がい者就業・生活支援センターこしじ

「障がい者就業・生活支援センターこしじ」社会福祉法人中越福祉会「みのわの里」は1980年設立。身体障害者・知的障害者の入所支援や就労移行支援、グループホーム15カ所などを運営する。

「痛み」を分かち合い、障害者雇用に影響なし

センター長で工房こしじ施設長の涌井幸夫さんにお話を聞いた。

「グループホームの修理には国の補助金が出ました。その後の中越沖地震でも建物が大方やられましたので、地震の修理はようやく終わったという感じですが。地震の怖さがある、豪雨や雷、強風が吹くと察にいられないという、精神的なものから立ち直っていない知的障害の人たちがいますね。授産施設の仕事面では、自動車関係の企業から仕事をいただいているので、東日本大震災、タイの水害の

影響がありますが、全体的な障害者雇用には、影響はないと思います」
障害者の解雇は中越地震直後に1〜2人。その後はなかったという。

「自動車部品関連企業に数人就職していますが、他の人たちと同じように障害者もワークシェアをして乗り切りました。互いに痛みを分かち合い、障害者を雇用しながら脱出しようとしている姿はすばらしいと思います。その後に中越沖地震がありました。障害者の雇用は進んでいます」

新規に就労の場も開拓

新潟県では、今年度から企業に勤めていた60歳以上の人々を、「チャレンジ就労支援コーディネーター」として1年間雇用、県内の障害者就業・生活支援センターに配置して、障害者の職場開拓を進めている。

2009年に工房こしじ内から信越本線の来迎寺駅近くに移転した「こしじ」に配属されたコーディネーターは昨年11月末までに181社を訪問、実習や就職の営業活動をした結果、40人の求人があり、11社に14人が就職できた。

「私たちが反省しなければならぬことは、事業所の理解がないから障害者雇用は進まない」と話してきたことです。いざ企業が雇用しようとする、送り出す人材が育っていない。働き方が企業と福祉では違います。福祉側が、働く意欲や働くことに必要なマナーも含めて障害者



涌井幸夫 障がい者就業・生活支援センターこしじセンター長

WORKSHOP REPORT

社会福祉法人中越福祉会 障がい者就業・生活支援センターこしじ

〒949-5406 新潟県長岡市来迎寺1864
TEL 0258-92-5163 FAX 0258-92-6731



震災時は「みのわの里工房こしじ」で仕事をしていた山古志村出身の関朋子さん。いまは施設外就労で三喜商事で働いている

たちに教えて、本気になって送り出さないとダメだと痛感しています」

ダンボール製造販売の三喜商事株式会社（長岡市）の企業内で、11年9月から紙製品の組立を始めた。工房こしじから施設外就労にきている人が11人。「施設の作業より質的・量的にも厳しいですが、三喜で仕事をするのが楽しいと言っています。また表情も豊かで笑顔です」

その1人、関朋子さんの故郷は山古志村。両親は仮設住宅で過ごした後、家を建て替えた。入所施設で暮らしていた関さんは、10年8月にケアホームに移った。「工房より、こちらの仕事が好きです。いろいろな仕事があるので、集中できず。夢はグループホームに入ることです。自分たちで買い物すること、自分たちで長岡へ出かけることができればいいですね」

また、昨年10月には企業の中に「ワークセンター北陽」を開設、1年間で6名の就職者を送り出すことができた。

■災害は不幸。 だが残したのも大きい

旧越路町の人口は1万3千人。その中で95人がグループホームで生活している。最初にグループホームができた1995年には「障害者は入所施設にいればいい」といわれていたが、いまは「自分の家が空き家になるので使ってもらえませんか」、「世話人さん」になりたいのですが」という電話がかかってくるよ

うになった。浦井さんは、「周囲をそのような雰囲気に変えていったのは障害者たち」という。

「工房こしじにお母さんがパートで働きにくる。お年寄りも手伝いにくる。地元の人が『世話人さん』になる。経済的なつながりもあり、グループホームに反対の声がなくなりました。地震当時8カ所だったグループホームはいま15カ所。身体障害者のケアホームもできました」

障害者の就業・生活支援をされていて大変だったこともあったが、中越地震は悪いことばかりではなかったと、浦井セン

ター長は受け止めている。「この7年間では、リーマンショックなどで自動車産業の仕事量が減り、障害者の家族に影響していったことが心配でした。一方で、地震でみんな避難所に避難しましたから、町の人たちが障害者をよく知ってくれました。地震や災害に遭って1回弱い立場になった人たちは、『社会的弱者』に温かくなり、みんなが支えあおうという精神が出てきたと思います。そういう地域では、障害者は暮らしやすい。災害は不幸ですが、残したのも大きいと思います」

東北の人たちにも、そのことを伝えたい。

「ソフト面では、『みんなが助け合っていかなければならない』、『困ったときはお互いさま、助けてください』、『助けるよ』という状況ができたのではないかと思います。ハード面では、孤独死しないためには、避難所は向かい合わせに建て

たほうがいいのか、中越地震を参考にし

て悪かったところを改善なさっています。些細なことかもしれないですが、とても大事な、人間が幸せに生きることが、災害を通して知らないうちに学んでいると思います」

障害者の雇用、温かな地域づくりにかける浦井さんの思いは、より熱くなっている。

「いままでは障害者問題に特化していましたが、自殺や介護、虐待、失業の問題などを含めて、そういう人たちを地域で支えるコミュニティを構築する時代がきたと思います。より豊かな生活はお金だけではない、みんなで支えあう社会だと気づく時代がくると思います。『お互いさま』で支えあう地域づくりが、東日本大震災でも遺産として一番残るのではないのでしょうか。いまは大変だと思いますが、地域を立ち上げるコミュニティ力が発信されるのは、日本にとってもプラス面があると信じています」

中越地震から7年。再訪した企業、支援センターは、その後を生き抜き、障害者雇用も続いていた。東日本大震災からまもなく1年。東北が少しずつ復興していくことを願っている。



段ボール製造販売の三喜商事での施設外就労